



上/万沢がかつて宿場町であったことを伝える「玉屋」の看板。営業はしていない。家屋が道路に面して斜めに建てられ、武者隠しの様相も残している。下/西行地区にある西行法師の石像。江戸時代の作だが、作者は分かっていない。穏やかな表情が印象的な石像だ。

る。今では住んでいる家が3軒とたった小さな集落に早春の陽が暖かく差し込んでいます。ここからさらに10分ほど下ったところに西行峠への入り口はある。

も知らぬ わが思ひかな」と記された歌碑が置かれている。峠からは富士川越しに富士見三景として有名な「盆中の富士」を見ることが出来る。ここは新富嶽百景の最も南に位置する場所でもある。また、身延方面を望めば、遠くには南アルプスの山々が見え、手前には昔多くの舟が行き来した富士川が悠々として広がり、その右手には身延線、左手には国道52号、そして駿州往還がある。さながら道の博物館のようである。やがて何年か後には、この光景の中を高速道路が走るうとしていく。



10分ほど下ると国道52号に合流し西行地区に入る。昔をしのびせるたたずまいの家や石碑が、当時の街道の面影を今に伝え、民家の庭先にある西行法師の石像は表情豊かに笠を手に持ち鎮座している。地名についた西行からも西行法師との関わりを強く感じさせる地域である。

おり、この地の歴史の古さを感じる。顕本寺より数分で万沢地区となる。かつて駿河湾沿いの東海道から身延山を目指す信者達の道は、富士川の両岸に三筋あったと言われているが、それらの道は万沢宿で一つとなり、信者達はその道を身延山に向けて歩いていったとのことである。万沢宿の中を通る道に対して斜めに構えた家々や、口留番所跡の碑、古びた旅館の看板などが、ありし日の国境の宿を伝えようとしているようでもある。



甲州と駿河を結ぶ交通といえ、富士川舟運が有名であるが、駿州往還(甲駿往還ともいう)も、多くの歴史を持つ街道である。今回は南部町切久保地区から西行峠、万沢地区までを歩いた。

山梨の旧道を訪ねて

一道一会
(南部町/西行峠・万沢宿)

道の駅とみざわ」から国道52号を清水方面に向け、数分歩いた右手(切久保バス停付近)に西行峠に向かう旧道がある。登りはじめて大きなカーブを二つ過ぎたところに、左手に進む細い道(駿州往還と思われる)があるが、あまり整備がされていないため歩きやすい舗装された道を行くことにした。

道の両側にはよく手入れされた杉やヒノキが、真っ直ぐに天に向かって立っている。この木々も、いつかは人々の家の柱や梁になるのだろうか? など、思いながら足をすすめる。30分ほど歩くと道は二手に分かれています。道標はないが西行峠を目指して左手に進む。道は平坦からやや下りになり、所々に竹林や茶畑がみえている。南部町はタケノコでも有名な地域である。土地の人から聞いた話であるが、この地域の赤土で育ったタケノコはアクが少ないため、風味よくおいしいのだそう。



「盆中の富士」。山間からのぞく富士が、かえって近くに見えて新鮮な感動を与えてくれた。快晴でなかったことが残念である。



西行公園から富士川を望む。正面に向かって流れる川筋と、左側を走る国道52号。その更に左側の山裾に、駿州往還が通っていた。